

フランス国立パリ聾学校 (INJS) とのオンライン交流

伊藤 詩織・松本 邦子・久川 浩太郎

本校は 2003 年に初めて、フランス国立パリ聾学校 (institut national de jeunet sourds de Paris) と姉妹校提携に関する協定書に調印し、2013 年には、相互に学生を派遣する交流が始まった。2013 年 12 月、本校の生徒がパリ聾学校を初めて訪問し、翌年 2014 年 4 月にはパリ聾学校の生徒が本校を訪問した。2015 年 12 月には本校の生徒と教員がパリ聾学校に 2 度目の訪問を行う予定であった。しかし、出発直前の 2015 年 11 月にパリ市内で同時多発テロが起こり、本校からの訪問は中止となった。翌年 2016 年 3 月には、パリ聾学校から本校に 2 度目の訪問があり、生徒たちは高等部普通科や寄宿舎での交流活動を通してお互いに親睦を深めた。そのような経緯があり、今年度 2016 年 12 月に、本校からパリ聾学校への 2 度目の訪問が再計画された。しかし、パリ市内の情勢が未だ安定していないという理由から、結局生徒の訪問は中止となり、2016 年 12 月 5 日～7 日の日程で、本校の教員がパリ聾学校を訪問することとなった。そこで、パリ聾学校への訪問を予定していた高等部普通科 2 学年の生徒から希望者を募り、本校教員のパリ聾学校訪問中にオンライン交流を図った。

キー・ワード：オンライン交流 手話表現 背景知識 相手の反応 コミュニケーション方法

1 はじめに

フランス国立パリ聾学校 (以下、パリ聾学校) と本校のオンライン交流は、2013 年 12 月の本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかった。今回、中止されたパリ聾学校訪問に参加予定であった生徒の中には通学生も含まれていたため、高等部普通科とのオンライン交流を行いたいと考えた。フランスと日本の時差 (冬時間) は 8 時間で、高等部普通科の下校時刻 18 時までを交流可能な時間とすると、日本の 17 時から 18 時、パリの 9 時から 10 時の間の交流が可能ということがわかった。また、本校教員がパリ聾学校を訪れる日は 12 月 5 日と 7 日の 2 日間であったため、2016 年 12 月 7 日 17 時から 18 時 (フランス時間 9 時から 10 時) になった。高等部普通科 2 学年の生徒に交流希望者を募ったところ、12 名の生徒 (男子 4 名女子 8 名) が集まった。

2 オンライン交流の実践

(1) 事前準備

交流本番までに事前準備の時間を 3 回設けた。1 回目と 2 回目の準備の間に 2 学期期末試験が行われたため、実際に準備を始めたのは 2 回目からとなった。また、交流当日にリハーサルの時間を設けた。

① 交流準備 第 1 回：11 月 24 日 15:40～16:30

交流の内容について参加生徒が話し合いを行った (図 1)。生徒から、自分たちにとって身近で、お互いに興味を持てるものとして、日本の「お菓子」を取り上げたいという意見が出た。身近なお菓子として駄菓子、伝統的なお菓子として金太郎飴が具体的に挙げられ、これらのお菓子を本校の教員が持って行き、パリ聾学校の生徒に実際に食べてもらうという提案がなされた。また、以前に本校の寄宿舎での交流活動で行った「フランスと日本の手話の対比」を今回も行いたいという意見が出た。

そこで、12 人の生徒を 2 つのグループに分けて、それぞれのグループが、交流準備第 2 回までに具体的な交流内容を考えることとした。



図1 交流準備第1回目の様子

② 交流準備 第2回：12月3日 14:00～15:00

グループに分かれて具体的な交流の内容を話し合った。「日本のお菓子」を紹介するグループは、最初、お菓子の名前を思いつくままに挙げていた。教員が「ただお菓子を羅列するだけでは何を伝えたいのかが見えてこないの、テーマを明確にしたほうがよい」という助言を行った。すると生徒から、「日本のお菓子のバリエーションの多さ」をアピールすることと、「駄菓子」の紹介を行いたいという意見が出た。そこで、「相手がどのようなことに興味を持っているのか」や「相手の持っている背景知識」を考慮して紹介をしたほうがよいという助言を加えた。最終的に、「伝統的なお菓子」「駄菓子」「ひと手間加えるお菓子」「ポッキーとトッポ」「お土産のお菓子」というジャンルを扱うことにした。

「フランスと日本の手話の対比」を行うグループは、日仏で対比させたい手話表現を考えた。パリ聾学校の生徒に対して、お互いにとって外国語である英語で文章を提示することにした。教員は、「パリ聾学校の生徒の英語力がどの程度かわからないので、英文を難しくしないほうがよい」という助言を行った。生徒たちは“rainbow”という表現を比較するために“I saw a rainbow.”、スポーツの名前を比較するために“I play volleyball.”、地球という表現を比較するために“We live on the earth.”そして日本のお笑い芸人の流行ネタである“I have a pen.”という表現を考えた。また、日本の高等学校の授業科目を日本の手話で表現し、パリ聾学校の生徒にどの科目を表現しているのかを言い当ててもらうク

イズを行うことにした。日本の手話で表現する科目は「歴史」で、パリ聾学校の生徒に提示する選択肢は「数学(math)」「理科(science)」「歴史(history)」「音楽(music)」とした。

最後にそれぞれのグループがお互いの計画を発表しあった。

③ 交流準備 第3回：12月5日 15:40～18:00

グループ毎に、オンライン交流時に使うスライドを、プレゼンテーションソフトを使って作成した。

「日本のお菓子」を紹介するグループは、交流準備第1回終了後に購入したお菓子を紹介する文章を英語で作った。スライドを作る過程で生徒間に議論が生じた。「伝統的なお菓子」として購入した金平糖は、ヨーロッパから入ってきたお菓子であることに気づいたため、日本の「伝統的なお菓子」として紹介してよいかどうかというものだった。中には、金平糖は「伝統的なお菓子」とは言えないのではないかと考える生徒もいたが、「金平糖がいつ誰によって日本にもたらされたか」という説明をすることで、今では日本の「伝統的なお菓子」と見なされているという紹介をすることになった。また、「ポッキー」の紹介を考える中で、生徒たちはフランスでは「ポッキー」は名前を変えて“MIKADO”として販売されていること、また、名前から受ける印象が文化によって異なるため、別の国では別の名前で販売されているということを学んだ。

「フランスと日本の手話の対比」を行うグループは、プレゼンテーションソフトを使うことに加えて、画用紙に手書きで文章を書いた。第2回の交流準備で話し合った英文を画用紙に書いている際に、教員は「英文が短すぎてその文を手話で表現する意味に欠けるのではないか」、「日本のお笑い芸人をおそらく知らないパリ聾学校の生徒に日本の流行のネタを表現してもらっても、相手には面白味が伝わらないのではないか」という指摘をした。結局、提示する文章は、“I saw a rainbow yesterday.” “I play volleyball every day.” “We live on the earth.” “I have a pen in my bag.”に決まった。

④ リハーサル：12月7日 15:40～17:00

交流準備第3回で準備したスライドを使って、リハーサルを行った。

生徒は最初、準備したスライドを棒読みするだけであった。教員が、「相手の反応を想定してリハーサルを進めたほうがよい」という助言をした。すると、少しずつ簡単な会話表現が出始めた。相手の反応を想定してリハーサルを進める様子も見られた。例えば、「フランスと日本の手話の対比」を行うグループは、「歴史」という手話表現を扱ったクイズのリハーサルで、パリ聾学校の生徒に「なぜその手話が歴史を表すのかと問われたらどう答えるのか」ということを想定した。結局、その場で回答を考えるのは難しいということに気付き、「歴史」という日本の手話表現の由来を伝えるスライドを追加した。

「日本のお菓子」を紹介するグループは、リハーサルを進める中で、簡単な会話表現が出てこないことがあった。「間違っているけど、単語だけでも伝われば構わない」と教員が助言すると、“Please eat.” “Water”などの単語が少しずつ出るようになった。



図2 リハーサルの様子

(2) 交流実践

交流は本校のタブレット端末2台と本校教員が現地に持参したタブレット端末2台をインターネットに接続して、それぞれの端末で映像用のFaceTime、文字表示用のiMessageの2つのアプリケーションを使用した。本校の生徒の音声発話（英語）を教員1名が入力し、パリ聾学校の生徒が手元の端末で確認して自由に文字入力ができる状態にした。パリ聾

学校側は映像情報のみをモニターに映し出した。本校側は2台の端末をモニターに繋ぎ、映像情報と文字情報の両方を生徒が見られるようにした。

時差の関係で、交流時間が1時間と限られていたため、お互いの自己紹介はせずに交流を始めた。交流の具体的な準備は、本校側が行っていたため、本校生徒がパリ聾学校の生徒に対して質問し、それに対してパリ聾学校の生徒が答えるという形式で進められた。

事前に確認をしていたため、アプリケーションの接続は問題なく行うことができた。しかし、交流の時間が日本時間の夕方であったため、部屋の電灯がスライドを表示したモニターに反射して、パリ聾学校側からは本校生徒が提示した画面上の英文が見えにくくなるという問題が発生した。英文が見えないと、パリ聾学校の生徒は本校の生徒が話している内容を理解することはできないため、現地にいた本校の教員が本校生徒の音声発話をホワイトボードに記入し、その後、本校側でスライドを白黒反転させることで対応した。

「フランスと日本の手話の対比」では、本校生徒がスライドに書かれた英文を指しながら日本の手話を表現することで、パリ聾学校の生徒は日本の手話を理解することができた。しかし、パリ聾学校の生徒は提示された英文を一文通してフランス手話で提示したため、本校生徒が提示されたフランス手話の単語一つ一つを読み取ることができず、生徒が対比したかった単語がどのような手話で表されているかを理解するのに困難を要した。現地にいた本校の教員が、「この単語は何というのか。」という本校生徒の音声発話を聞きとり、パリ聾学校の教員に手話の意味を教えてもらうということは数回あったが、本校生徒がパリ聾学校の生徒に直接英語を用いて尋ねる様子は見られなかった。

「日本のお菓子」の紹介では、お菓子の紹介だけではなく、実際にお菓子をパリ聾学校の生徒に食べてもらったため、パリ聾学校の生徒にとって魅力的なテーマとなった。なかでも「ねるねるねるね」はパリ聾学校の生徒の興味を引いた。本校生徒はこの

お菓子を「ひと手間加えるお菓子」という理由で選んだが、パリ聾学校の生徒にとっては「不思議な味」のお菓子として、興味を持たれた。「ねるねるねるね」の作り方を紹介する際、本校生徒がパリ聾学校の生徒に対して英語で説明できるか、という不安があった。しかしながら、本校生徒が画面越しに一緒に「ねるねるねるね」を作ること、パリ聾学校の生徒もそれを真似しながら作ることができた。

「日本のお菓子」の紹介は、パリ聾学校の生徒の興味を引いたため、パリ聾学校の生徒がお菓子の夢中になってしまい、本校生徒の発話に気付かないことが多々あった。

また、交流はすべて英語を用いて行われたが、パリ聾学校の生徒の中には、英語の意味を理解して交流を楽しんでいる生徒もいた一方、英語を理解できず、パリ聾学校の教員にフランス語に訳してもらいながら交流に参加している生徒もいた。特に、本校の生徒がアドリブで発話をする際は、英語で話しながら日本の手話で表現したため、パリ聾学校の生徒は内容を理解することができなかった。その際は、本校の生徒の音声発話を聞き取ったパリ聾学校の教員が、フランスの手話で表現した。

交流終了後、パリ聾学校の生徒はすぐに他の授業があったため、生徒から直接感想を聞くことはできなかった。しかし、パリ聾学校の教員から「生徒がとても生き生きして楽しそうだった」という感想をいただくことができた。



図3 交流の様子

(3) 事後反省会：12月13日 15：40～16：30

質問紙の選択肢と自由記述に答えたうえで、生徒

が意見を共有した。質問紙の内容は3 調査結果に詳しく記載した。

3 調査結果

事後反省会時に選択式の質問紙調査を実施した。質問は10項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝5点」、「そう思う＝4点」、「どちらでもない＝3点」、「そう思わない＝2点」、「全くそう思わない＝1点」として集計し、平均値を降順で並べた(表1)。それらの特徴をまとめると、交流時間が1時間では足りず、今後も国際交流を継続したいこと、フランスの文化や手話に興味が高まり、実際に現地に行きたいと感じるようになったことが明らかになった。また、交流の中心は英語やジェスチャーになったものの、英語の学習意欲にはそれほどつながらなかったことが明らかになった。

質問紙調査では、選択式の質問の他に自由記述も行った。質問項目は、①今回のオンライン交流で印象に残ったこと、②今回のオンライン交流でうまくいったこと、③今回のオンライン交流で、うまくいかなかったこと、④次回のオンライン交流で取り組みたいこととした。

①オンライン交流で印象に残ったことの記述では、異文化間のコミュニケーションに関する記述や手話の違いに関する記述が多く、オンライン交流でも国際交流の効果が大きいことが考えられる。

②オンライン交流でうまくいったことの記述では、実際にお菓子を試食してもらったため説明が伝わりやすかったことや、英文をもとに日本とフランスの手話を対比することができたことなど、発表方法の工夫についての記述が多かった。これらのことから、2つのグループに分かれて発表内容を検討したり、発表方法を工夫したりしたのは効果的であったと考えられる。

③今回のオンライン交流でうまくいかなかったことの記述では、プレゼンテーションソフトを表示していたモニターが見づかったことや、用意してい

た内容が多すぎたことなど、準備不足に関する記述が多かった。これらのことから、高等部普通科としてのオンライン交流は初めての試みであったため、交流本番の見通しがもてなかったと考えられる。

④次回のオンライン交流で取り組みたいことの記述では、今回行えなかったフリートークを行いたいという記述や、本校の発表だけではなく、パリ聾学校からの発表を受けたいという記述が多かった。これらのことから、こちらの要望を予め交流相手に伝えることが必要であると考えられる。

4 おわりに

今回の交流を通して、本校生徒から「また交流をしたい」という意見が出た。今回の交流は英語を用いて行ったが、英語が得意でない生徒からもこのような意見が出ていたことから、本校生徒にとって交流が有意義な時間となっていたことが窺える。しかし、時差の問題があるため、オンライン交流を年に何度も行うことは容易ではない。そのため、オンライン交流に限らず、他の方法も視野に入れながら、パリ聾学校の生徒と本校生徒が主体的に交流できる場を教員側が提供する必要があると感じた。

また、今回の交流を通して、パリ聾学校の生徒と本校生徒とのコミュニケーションの難しさを感じた。今回の交流では、英語をコミュニケーション方法として活用したが、パリ聾学校の生徒が本校の生徒の英語を理解できず、伝えたいことが伝わらないという状況が多々起きてしまった。今後、交流を重ねていく中で、双方が理解しやすいコミュニケーション方法を生徒たち自身で発見できればと考えている。

今回の交流は、準備期間が短くパリ聾学校との打ち合わせ時間がほとんどなかったため、本校生徒がパリ聾学校の生徒に対して、テーマに沿って話をするという形で行われた。そのため、お互いに自由に発言をしあって交流をするという時間が取れないまま交流を終える形となってしまった。テーマにこだわらず、生徒たちが自由に話せる場というのもまた必要であると感じた。

表1 フランス国立パリ聾学校とのオンライン交流に関する質問紙調査結果

質問項目（平均値の降順）	平均値
今後も国際交流に取り組んでみたい。	4.75
交流時間（約1時間）は短かった。	4.67
オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じた。	4.67
今回の交流を通して、フランスの手話に興味をもった。	4.42
今回の交流を通して、フランスや交流相手に興味をもった。	4.42
今回の交流は、社会人になったときに役に立つと思う。	4.17
発表では交流相手に分かるように工夫した。	4.00
準備や練習の時間がもっとほしかった。	4.00
今回の交流を通して、英語をもっと学習したいと思った。	3.92
今回の交流を通して、英語に興味をもった。	3.75

〔参考文献〕

鈴木淳一（2015）フランス国立パリ聾学校との交流.
筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要,37,76-81.